

巻頭言

2010年4月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

15才の君へ…10年後の自分へ向けて目的を持ってはじめよう!

茗溪塾塾長 宇野 雅春

今年の卒塾式(小学生と高校生)では、先生方が「手紙」を合唱しました。練習を積み重ねているうちにだんだんと歌詞の内容がわかってきました。歌詞の一番は15才の自分から未来の自分へのメッセージで、二番が未来の自分から15才の自分へのメッセージになっています。中学生は人数が多いため各教室実施の卒塾式ですが、来年はぜひ、全校合同で中3生に向けてこそ、この歌をプレゼントしたいと思いました。

今、2010年度「合格体験記」を作成していても感じる場合があります。中学入試、高校入試、大学入試それぞれに色々と思いがたることがありますが、何しろ一番紆余曲折が多いのが高校入試なのです。公立中学の生徒なら誰もが受験するわけですから、その幅はとても広く、自分が受験するレベルをしっかり認識していないと出遅れることとなります。合格体験記で目につくのは「出遅れ」に対する反省です。「本格的な受験勉強は部活が終わってからでいいや」という甘い考えのために、今春泣いた生徒は多かったと思います。特に公立高校は、内申点というものがあり千葉県や埼玉県では中1からの内申が受験に関係するため、最低でも3年の春には懸命のスタートを切る必要があります。それでも内申で泣いた生徒は多いという事です。都立高校での1万2000人を超える不合格というのは史上初めての事です。上位校ほど倍率が高いというのも、日本の経済状況に起因しているように思えます。豊かなときは、中位の高校の方が倍率が高かったのですが高校卒業後の就職難からの影響もあるように思えます。何となく全員が受験するために目標を立てにくいというのが高校入試です。おまけにやっかいな反抗期というものがあります。「何故、自分は受験するのだろうか?」と受験が近くなるほどに思い悩む生徒がいたり、受験を巡って親子トラブルが続くこともあります。現実認識のある親と日常に流される子供、なかなか学習のリズムを作れないまま苛立っているところへ、がみがみと言われ、「切れる!」ということになります。15才は置かれている状況だけでも、とても重い時期になっています。このところの社会状況を見ていると実に15才は人生の岐路であることがわかります。何かを目指すとしたら実はリミットともいえる時期なのではないか?決めつけるのはちょっと厳しすぎると思うけれど、受験のたびに、自分の将来というものをしっかり考えていく必要は嘗ての右肩上がりの時代よりずっと切実になってきていると思うのです。

受験勉強も基礎学力を確立するチャンスと考えれば、周りに危機感をあおられ、仕方なくやる受験勉強が有意義とは思えません。受験勉強は必要悪というパラダイムを転換する必要があります。もっと主体的で伸びやかな発想はできないものだろうか?というより現実認識を変えた方がよいのではないかという思いに駆られます。勉強だって面白い!ということ。今切実に感じることは、大学に入ってから自分の職業や生き方をきめていくのが遅い!ということ。中学から始めていかないと、よりやりがいのある仕事ほど単なる夢や希望で終わってしまうように思います。

中学で部活に追われることも必要なことです。ただし、自分の10年後を想定して、目標を決めたところから中学校生活も組み立てられていくべきではないでしょうか?勉強も、部活動も、その目標の中に位置づけられて初めて有意義になるということ。中学生の合同特訓では、少し社会認識へのアプローチを入れてみました。今年一年の目標ではなく、10年後の目標へ向けて今年一年をどう過ごすのかということ。目的を持ってはじめる」ということが、この時代だからこそ重要さを増しているように思います。今は、子供達の教育内容が変化していく必要があると思っています。高い語学力と人間性に支えられた有為な人材作りに塾もまた協力を惜しまない覚悟をすべき時のように思います。15才の君へ…10年後の自分のために目的を持ってはじめることをこの4月に考えてみませんか?